

開校記念日に思う ～ 龍谷の原点

いしだ がくじ こころ

— 創設者・石田學而師の心情 —

けんがくのせいしん
【建学の精神とは】私立学校は、都道府県が設置する公立学校と異なり、はじめに学校をつくらうとした人(人々)の目的や教育目標により、それぞれ独自の考えや方針により運営されます。その学校の基盤になる考えを「けんがくのせいしん建学の精神」といいます。

がくじ

学校創設者・石田學而理事長(1912/12/23生～1992/12/30没)は、若い頃から教育事業をやりたいという目標を持っていました。具体的には、自身が僧侶であることから、【知育】読み、書き、計算能力や【体育】身体能力に、プラス【徳育】仏教の教えをベースにした人間教育の出来る学校を始めたいという大きな理想でした。やがてその時がやって来ました。昭和32年10月木造モルタル2階建校舎を現在地に建設。道内私立高校普通科では初となる男女、共学校の開校を北海道に申請したのです。翌33年1月に北海道知事から「旭川高等学校」開校の認可がおり、ようやく高校づくりの夢のスタートを切ったのです。

生徒の募集は順調に進み、学年定員300人に対し志願者は1,200人を超え、志願倍率はその年の私立高校全道一となりました。そして、選抜の結果374人を第1期入学生として迎えたのです。

昭和33年4月12日、開校式・入学式に臨んだ石田理事長は、生徒、保護者、来賓を前に次ような挨拶を述べたと「北海道私学教育史」に記述されています。原文はすこし難解なので平易な表現に書き換えました。

「多くの人を持っている普通の生き方は、どこまでも自分の力をあてにして目標、欲望を追求しがちです。そこへ全力をつぎこんで生き抜こうとします。しかし、この目標、欲望をどこまでも追求する生き方は、常に限界を招くのです。わたしたちは、次代を担う子供たちへ、自分の人生をどのように生きるべきか、これをどのように伝えるべきか、真剣に考えねばなりません。そこで、私たちは、仏教の教えに基づいた人間の形成を図っていきたい、自己の利益ばかりを追求するより、他者の利益を思い、配慮し、重んずる人間の育成がわたしたちの学園の願いです」と表明したのです。これが龍谷をつくった創設者の心情でした。

けいほう

なお、開校記念日は、理事長のご尊父・石田慶封師(僧侶・ホトギス派歌人:浄土真宗本願寺派ハワイ開教区総長～北海道札幌別院輪番:責任者の職名)が残した恩恵をしのび、逝去された1月13日にちなみ、花がいつせいに開花する6月13日と定められました。こうして、ご縁をいただく者が開校記念日の由来を確認することで、周りの人たちへ配慮する気持ち、一人の力ではなく、生かされているということを実感しましょう。合 掌



創設者石田學而師は本校開設前に、市内5条通6丁目にあった自坊(宅)慶誠寺境内に高校進学塾「きくし塾」を開塾し、多くの生徒を集め教えていた。



石田初代理事長(50代前半)
10周年記念小誌掲載写真から



かくけん
尾崎覚寛初代校長(60代前半):氏は今の校風「人柄の龍谷」づくりをよく生徒に諭した。「よしや勉強で負けても、体育能力で負けても、人柄で負けるな」と。「他者への利」を重んじ、人柄を磨けと説いたという。

(下)当時の現在地はあたり一面水田、その中に校舎が建設された。下校時はカエルの大合唱に送られながら帰宅したという。(右)男子は紺色の三つボタンブレザー・スラックスにグレーのネクタイ、紺のベレー帽、女子も同色のブレザーにジャンパースカート、紺のベレー帽、肌色のストッキングという、当時としては超斬新なファッションセンスの制服でした。

